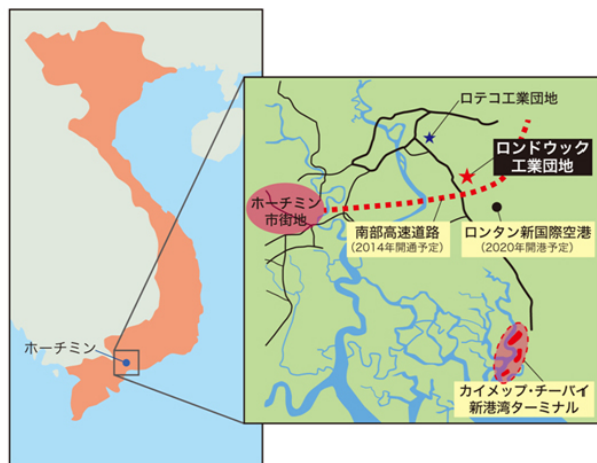


第1号 ベトナムモノづくり中小企業ネットワーク計画

ベトナムモノづくり中小企業ネットワーク計画

モノづくり中小企業にとって、いまだ厳しい経済状況が続いており、苦境からの脱出、さらなる成長のために、事業の海外展開は不可欠な戦略になっています。しかしながら、海外展開は中小企業にとって、資金、人材、ノウハウなど課題も多く決して簡単なことではありません。そこで、ベトナムでのレンタル工場という最小限の投資形態で何社かが共同して進出する計画をスタートすることになりました。

具体的には、ホーチミン近郊のドンナイ省で現在造成中のロンドウック工業団地に、500平米のレンタル工場10～20区画(予定)を準備し、そこにモノづくり中小企業が一斉に進出するという計画です。工場の建設開始は2012年11月頃、操業開始は2013年9月を予定しています。



ロンドウック工業団地の周辺図

進出の検討・準備、進出申請、進出後の操業支援を、私ども「The Support」(ベトナムへの進出企業に対するサービス会社)が一貫してお手伝いしながら、スムーズな進出の実現をめざしていきます。

では、なぜロンドウック工業団地なのか。第1の理由は、ベトナムには計画、造成中を含めると約260の工業団地があるとされています。しかし、そのほとんどは現地資本あるいは中国、シンガポール資本です。ロ

ンドウックのように日本資本(双日、大和ハウス、神鋼ソリューション)が9割近くを占める工業団地は稀な存在です。また、日本企業だけの入居をめざしている工業団地は他にありません。第2の理由は、ベトナム進出において、工業団地の選択は事業成功の重要なポイントになるからです。というのは、海外展開に不慣れた中小企業が、ある程度日本語で手続などを進められ、互いに協力し合い融通をきかせられる相手が近くにいることは、進出初期段階で大きな力になるからです。ロンドウック工業団地には好条件がそろっています。第3の理由は、ベトナム最大の商業都市ホーチミンの近郊であることです。ベトナムへ進出している日系企業(約1600社)の6割以上はホーチミン周辺に居を構えていますし、エンジニアなどの雇用においてもホーチミン近郊は有利だからです。

ロンドウック工業団地の総開発面積は270ha、分譲面積178ha。来年9月の操業開始時には、大半の区画に日本企業が進出し、日本企業が集積する代表的な工業団地になっていると推測できます。こうした見通しの中、「日本のモノづくり中小企業のための集積地をつくりたい」という私どもの思いに対し、ロンドウック工業団地運営会社が賛同の意を示し、そのご協力の下で500平米レンタル工場10～20区画(予定)の建設が可能になりました。運営会社が手間のかかるレンタル工場運営を決断された背景には、裾野産業(材料加工、部品製造)の育成というベトナム政府の意向も追い風になっていると推測できます。

当計画は、モノづくり中小企業が自力で危機を打開し、新たな成長の光を見いだす手助けになればという思いから推進している小さな試みです。しかしながら、意欲と技術を持ったモノづくり中小企業が連帯し、ベトナムの地で企業集積を実現できれば、モノづくり競争力の向上が期待でき、閉塞状況にある日本のモノづくりが新しい形で蘇生できると確信しています。

海外展開、なかでもベトナム進出をご検討中の方は
お気軽に当社へご連絡ください。知恵を出し合いなが
ら課題解決方法を探っていきたいと考えております。

上記したロンドウック工業団地レンタル工場計画は、
ベトナムモノづくり中小企業ネットワーク計画の第1ス
テップと位置づけています。今後は、モノづくり中小企
業のベトナム進出の支援を一層強化し、ベトナムの地
でのモノづくりネットワーク充実(企業集積)を図ってい
く展望を持っております。したがって、レンタル工場
という形態ではなく自力でベトナム進出をお考えの中
小企業の方々との連帯も積極的に推進致します。モノ
づくり中小企業ネットワーク計画にご興味をお持ちの
皆様の参画を心より歓迎致しております。



ホーチミン市街地

ロンドウック工業団地のレンタル工場進出計画に関
する進出検討・推進会議を6月27日に開催予定です。
当計画の進捗状況については、順次メールマガジンで
お知らせ致します。

ドンナイ省について

ロンドウック工業団地のあるドンナイ省について簡単
に情報を整理します

まずベトナムの行政は、5つの中央管轄都市(ハノイ
ハイフォン、ダナン、ホーチミン、カンター)と58の省、合
計63の行政単位で形成されています。共産党の指導
の下、それぞれの行政単位ごとに「立法―議会」「行政
―人民委員会」「司法―人民裁判所」の三権分業が行
われています。言うまでもなくドンナイ省は、63の行政

単位のうちのひとつという位置づけです。

ドンナイ省は、ベトナム経済の中心都市ホーチミンの
東隣に位置し、ホーチミン近郊のバリアブントウ省、ビ
ンズオン省、タイニン省、ビンフック省とともに経済成長
の著しい省のひとつです。

人口は256万人。ホーチミン(740万人)、ハノイ(650
万人)、タインホア省(340万人)、ゲアン省(290万人)
に次いでベトナムで5番目に人口の多い省です。省都
はビエンホア。省内に工業団地も多く、日系企業の進
出が多い省でもあります。一人当たりGDPは1186ドル。
バリアブントウ(7847ドル 石油生産の中心)、ホーチミ
ン(2249ドル)、ハノイ(2043ドル)、ビンズオン省(1381
ドル)に次いで5番目になります。ホーチミンと近郊の
省でベトナムのGDPの約35%を占めており、ドンナイ
省はベトナム経済のエンジン部分に位置しているとい
う見方もできます。

さらに、ホーチミンを核とした高速度道路網の建設は
急ピッチで進められ、省の南にロンタン国際空港建設
も予定されています。さらに、アジアのハブ港をめざす
新港湾カイメップ・チーバイ港も近い立地にあり、今後
の経済発展が期待されています。



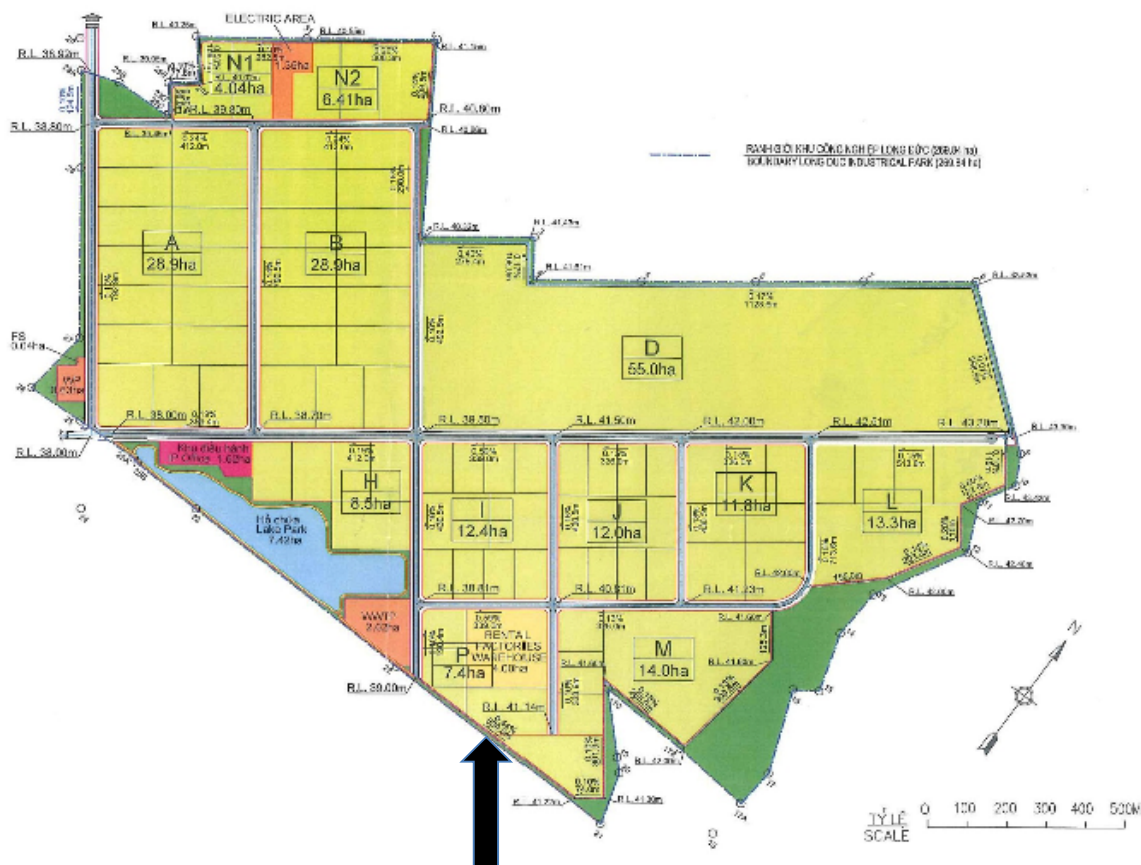
現在造成中のロンドウック工業団地

ドンナイ省の工業団地

- Thanh Phu
- Bien Hoai 1&2
- Loteco(ロテコ 日系 双日)
- Amata
- Song May
- Ho Nai
- Bau Xeo
- Song Thao
- Dau Day
- An Phuoc
- Long Duc(ロンドウック 日系 双日、大和ハウス等)
- Loc An-Binh Son
- Nhon Trach 1,2,3,5&6
- Go Dau
- Ong Keo

サイゴンタイムズ紙(6月4日,2012)によると、ドンナイ省は、裾野産業企業の支援強化のため、ザンディエン(Giang Dien)工業団地、ニョンチャック(Nhon Trach)第6工業団地、アンフオック(An Phuoc)工業団地の3カ所に、約80haづつの支援拠点を設け、優遇措置を取るとの報道がありました。裾野産業誘致に関して、ドンナイ省が本腰を入れていることを意味する報道です。裾野産業としての資質を備えた日本のモノづくり中小企業にとっては、まさに追い風が吹いています。

ロンドウック工業団地の平面図



レンタル工場の建設が予定されている区画

ベトナムという国について(1)

ベトナムのラストエンペラー

ラストエンペラーと言えば、ハリウッドで映画化された中国清朝の12代皇帝「溥儀」を思い起こす方が多いと思います。溥儀は日本と関わりの深い人でした。日本での潜伏生活も長く、日本軍に担ぎ出され、傀儡としての満州国皇帝の座にもつきました。日本、中国の政治的思惑に翻弄された薄幸のラストエンペラーという印象があります。

では、ベトナムのラストエンペラーは、日本との関わりの中でどういう人生を歩んだ人なのでしょう。ベトナムのラストエンペラーは、グエン(阮)朝の直系長男の血を引くクオン・デ(彊祗)です。彼が生まれた時(1882年)には、既にフランスによるベトナムの植民地支配が始まろうとしており、彼が成人する頃にはフランスの圧政に対するベトナムの人びとの怨念は相当に高まっていました。

グエン朝は、ベトナム中部の都市フエを拠点に北部トンキン(東京)、中部アンナン(安南)、南部コーチナ(交趾支那)を1802年に統一しています。その後、1883年からはフランス領インドシナとして実質的なフランスの植民地支配の下におかれ、1940年から1945年までは日本の統治下におかれることになります。しかしながら、傀儡とはいえグエン朝直系の皇帝が支配する体裁を継続し、1945年にホー・チ・ミンが「ベトナム民主共和国」を宣言するまで続いたベトナム最後の王朝です。

19世紀から20世紀にかけてヨーロッパの大国による帝国主義はアジアの国々を苦しめていました。そんな中、日本は日清、日露戦争に勝利し、アジア諸国の希望の星でした。フランスの圧政からの脱却と独立をめざしてベトナムではドンズー(東遊)運動が起こります。日本を見習いながら国力を高めようという一種の民族運動です。日露戦争の後、300名を超えるベトナムの若者が日本に留学しています。クオン・デ(彊祗)も1906年、妻子をフエに残したまま日本の地を踏むことになります。それから半世紀にわたり、日本でベトナムの実質的な独立をめざした闘いを続けます。しかし残念ながら、1951年に死亡するまで母国ベトナムに帰

ることはありませんでした。1945年に日本が無条件降伏し、日本のベトナム支配が終わり同時にグエン朝も終焉をむかえます。クオン・デ(彊祗)は、その一部始終を日本で為す術もなく傍観するしかなかったのです。まったく皮肉な歴史です。

クオン・デ(彊祗)は、日本での44年間の潜伏生活の中で、大隈重信、犬養毅といった大物政治家、北一輝、大杉栄などの革命分子、さらには当時のベトナムで事業を成功させた大南会社の松下光廣といった錚々たる人たちの支援を受け、ベトナムの復国をめざしていました。

激動する世界情勢に国ごと飲み込まれそうな厳しい時代においても、日本とベトナムがアジアの一員として協力し合った歴史的事実に感動を覚えるのは私だけではないはずです。

クオン・デ(彊祗)の臨終の言葉は、「兄弟同士の戦争はやめること」でした。その後25年にわたり続いたインドシナ戦争、ベトナム戦争という悲惨な歴史を思うとき、その言葉の重さに愕然とします。1975年にベトナム戦争が終結し、ベトナムは社会主義国として再出発します。当然以前の王朝の歴史は表舞台から消えています。クオン・デ(彊祗)は現在、フエの郊外にひっそりと葬られており、当分の間、クオン・デ(彊祗)の歴史的な役割が取り上げられることもないと思います。しかし、いずれ彼の行動が見直され、日本との関係にも脚光が当たる時代がくるかもしれません。ベトナムのラストエンペラーの名は、記憶に止めておくべき価値があると思います。

それにしても、ラストエンペラーという響きは歴史を掘り起こしたいという好奇心を刺激します。こうしたベトナムのラストエンペラーの生涯と日本との関わりを詳細に取り上げている本が、『牧久著「安南王国の夢 ベトナム独立を支援した日本人」ウエッジ 2012 年2月25日発行 ¥2,520』です。最近出版されたベトナム関連の書籍の中では、最も興味をそそられる本でした。一読をお勧めします。